

中村廣治のリカード研究

福田進治

はじめに

スラッファ編『リカード全集』（1951-1973）刊行後、日本のリカード研究はスラッファのリカード解釈から多くの知見を獲得しながらも、やがてスラッファの影響を克服し、日本独自の道を歩んできた。すなわち、日本の研究者たちは、スラッファの初期リカードの利潤理論に関する「穀物比率論」解釈を批判的に検討し、独自の初期リカード解釈を確立するとともに、初期以降のリカードの労働価値理論の発展過程を綿密に検討することによって、欧米には見られない独自のリカード研究の成果を生み出してきた。最初にスラッファの「穀物比率論」解釈を批判し、その後の日本のリカード研究史の中で中心的な役割を果たしてきたのが、羽鳥卓也（1922-2012）であるが、羽鳥から影響を受け、羽鳥と論争しながら、羽鳥とともに『リカード全集』刊行後の日本のリカード研究を牽引してきたのが、中村廣治（1931-2014）である¹⁾。

2012年12月に他界した羽鳥を追うように、2014年7月に中村は他界した。日本のリカード研究は相次いで大きな2本の支柱を失ったのである。日本のリカード研究者たちは例外なく、羽鳥と中村から学問上の多大な恩恵を受けてきた。羽鳥と中村がいなかったなら、今日の日本のリカード研究はまったく違ったものになっていただろう。羽鳥が他界したときと同様、多くの研究者が中村の他界を惜んでいる²⁾。筆者も然りである。後に言及するように、中村はリカードの労働価値理論の成立の論理について、「連動論に基づく連動論顕化否定の論理」（中村 1996, p.24）という一種の生産費説解釈を提示した。筆者のリカード解釈は中村のこの解釈を継承し徹底することによって生まれた³⁾。この解釈を含めて、中村のリカード研究は欧米には見られない卓越した貢献であり、今日でもまったく色あせていない。

本稿の課題は、こうした中村のリカード研究を振り返り、その貢献と理論的意義の再評価を試みることである。中村のリカード研究は多くの論点を含み、各々が極めて詳細であるから、本稿でそれらすべてを検討することは適わない。以下では、中村のリカード研究の特色を明らかにするであろう論点に絞って検討する。また、羽鳥と中村の関係を検討しながら、中村が日本のリカード研究史の中で果たしてきた役割について考える。その上で、日本のリカード研究の特色についてあらためて考えてみたい。

1 中村廣治のリカード研究

最初に、中村のリカード研究の経緯を概観しておきたい。中村は1931年、福岡県に生まれ、地元の九州大学に進学した。1958年、九州大学大学院を修了し、大分大学に着任、その後、広島大学、熊本学園大学と移籍し、九州産業大学で大学教員としての経歴を終えた。しかし、その後も中村は研究の手を緩めることはなかった。この間、以下の3冊の研究書を上梓した。

- 『リカードゥ体系』(1975)
- 『リカードゥ経済学研究』(1996)
- 『リカードゥ評伝－生涯・学説・活動－』(2009)

このように中村は生涯にリカードの研究書ばかり3冊刊行している。中村は大学院では古典派の貨幣・信用論史を研究していたが、大分大学着任後、リカード研究に取り組むようになった。その後も中村は一貫してリカード研究を推し進めていった。中村は決して多作家ではなかったが、各々の著書は極めて充実した内容を含んでおり、しかも後の著書になるほど重厚になっている。どうして中村はリカード研究に取り組むようになったのだろうか。恐らくは、羽鳥の影響が決定的であったと思われる。1965年、羽鳥は小樽商科大学で学会報告「初期リカードゥの分配論」⁴⁾を行うとともに、論文「初期リカードゥの価値と分配の理論」(羽鳥 1965、羽鳥 1972に所収)を発表し、スラッファの「穀物比率論」解釈を世界で最初に批判した。後に触れるように、中村は羽鳥のスラッファ批判に衝撃を受けたと述懐している。そして、羽鳥のリカード研究を検討することが契機となって、中村のリカード研究の歩みが始まった。その最初の成果が1975年刊行の『リカードゥ体系』である。ここで中村は羽鳥の影響を受けて、それ以前は受け入れていたスラッファのリカード解釈を批判的に検討しつつ、羽鳥のリカード解釈にも同意することなく、独自の初期リカード解釈と『原理』の理論構造に関する解釈を提示した。この頃から、羽鳥と中村は互いに相手の研究から刺激を受けながら各々のリカード研究に取り組むライバルのような間柄になっていった。中村は羽鳥の研究から刺激を受けて、ますます精力的にリカードの労働価値理論の発展過程に関する研究に取り組むようになった。その成果が1996年刊行の『リカードゥ経済学研究』である。ここで中村はリカードの労働価値理論の成立の論理と「修正」の問題を検討するとともに、価値論以外の論争的な諸問題についても検討し、彼独自のリカード解釈を確立しようと試みた⁵⁾。晩年の中村はそれまでの彼自身のリカード理論の研究成果をまとめるとともに、リカードという人物の全体像を描くことに精力を傾けた。その成果が2009年刊行の『リカードゥ評伝－生涯・学説・活動－』である。タイトルが示すように、ここではリカードの生涯、経済理論、議会等の諸活動についてまとめられており、中村のリカード研究の集大成と呼ぶにふさわしい内容となっている⁶⁾。

以上のように、中村は1960年代後半頃から羽鳥の影響を受けて、スラッファのリカード解釈を批判的に検討しながら、彼自身のリカード研究を開始した。その後、羽鳥と中村は互いに相手の研究から刺激を受け、まさに切磋琢磨しながらリカード研究に取り組むようになった。後年、羽鳥がス

ミス研究やマルサス研究にも取り組むようになったのに対して、中村は一貫してリカード研究に取り組み続けた。晩年は、中村もマルサス研究に手を付けたが、それもリカードと関係する論点に限られたものだった⁷⁾。こうして羽鳥と中村は互いに切磋琢磨しながら、『リカード全集』刊行後の日本のリカード研究を牽引してきた。羽鳥と中村のスラッファ批判やリカード研究は、日本のリカード研究の特色を規定することになった。

以下では、中村のリカード研究のうち、中村が彼独自の理論的貢献を示そうと試みた『リカードゥ体系』及び『リカードゥ経済学研究』の内容を検討し、その後、羽鳥と中村の関係をあらためて検討したい。

2 リカード研究の開始—『リカードゥ体系』(1975)—

本章では、中村の『リカードゥ体系』の内容を検討する。その前編「リカードゥ体系の生成」では、初期リカードが地金論争に関わる議論から出発し、一般的利潤率の決定に関する議論を経て、労働価値理論の形成に向かう過程が検討され、後編「リカードゥ体系の理論構造」では、『原理』各章の相互関係と論理構成が詳細に検討されている。これらのうち、以下では初期リカードの利潤理論及び『原理』の理論構造に関する中村の研究を概観する。

スラッファは『リカードゥ全集』「編者序文」(1951)で、初期リカードの利潤理論に関する「穀物比率論」解釈を提示した。すなわち、初期リカードは農業部門の投入と産出がともに「穀物」のみからなると仮定して、利潤率の決定の問題を議論していたという(RW, I, pp.xxxi-ii)⁸⁾。こうした「穀物比率論」解釈は、欧米のリカード研究において支配的な解釈となった。しかし、1965年、羽鳥はその「穀物比率論」を批判した。羽鳥は1814年のリカードとマルサスの往復書簡や1815年刊行の『試論』の内容を検討した結果、これらの文献に基づいてスラッファの解釈を正当化することは難しいと主張し、さらに当時のリカードはスミスの支配労働＝価値尺度説を克服していなかったとする彼自身の解釈を提示したのである(羽鳥 1972, pp.196-213)⁹⁾。こうした羽鳥の議論を受けて、中村はスラッファの初期リカード解釈に対する批判をより体系的に展開した上で、彼独自の初期リカード解釈を提示した。その中心的な論点の一つが1814年6月26日付のリカードのマルサス宛書簡(50)に見られる次の叙述に関わるものだった。

「穀物の輸入に対する諸種の制限の効果は利子率を低下させる傾向をもつという点を疑っておいでですが、この疑いには賛成できません。資本が増加しないのに、穀物の価格というよりも価値が上昇すると、穀物の価格にもなって他の商品の価格も(徐々にですが)確かに上昇するでしょうが、たとえこの上昇がなかったとしても、それらのものへの需要は必然的に減少します。資本が同じなら、生産も減少し、需要も減少するでしょう。需要は需要される諸商品に対して支払をする力の欠乏の他に限界をもっていません。生産を減少させる傾向があるものはすべてこの力を減少させる傾向があります。利潤率と利子率とは、生産にとって必要な消費

に対する生産の比率に依存しなければなりません。——この比率はまた、本質上、食糧の安価さに依存しており、この食糧の安価さこそ、我々が〔その作用に〕どのくらいの時間を認めようと自由ですが、結局、労働賃金の一大調整者であります。〕(RW, VI, p.108)

ここでリカードは、利潤率は「生産の比率」に依存すると述べながら、同時に「食糧の安価さ」に依存すると述べている。スラッフアは「生産の比率」が「穀物比率」を意味するとして、この叙述が「穀物比率論」解釈を正当化する間接的証拠であると主張したが、羽鳥は、それは必ずしも「穀物比率」を意味しないと主張した(羽鳥 1972, pp.197-98)¹⁰⁾。中村はさらに踏み込んで、リカードは農業の収穫逓減を前提として、穀物輸入制限が総生産量の減少させ、利潤率を低下させるという実物タームの議論を展開しながら、同時に、「食糧の安価さ」が利潤率を規定するという価格タームの議論を提示していると主張した。そして、リカードは実物タームと価格タームが混在する議論の中で、不十分ながらも、「賃金-利潤相反論」の基礎を獲得したという(中村 1975, pp.50-75)。こうした中村の初期リカード解釈は非常に綿密に構成されたもので、スラッフアの解釈とも羽鳥の解釈とも異なる独自の解釈である。その後、中村は彼自身の解釈を放棄し、千賀重義の「部門別利潤率規定論」(千賀 1972)を受け入れることになるが、価格タームの議論と「賃金-利潤相反論」の成立を基軸とする視角はその後一貫して保持することになる¹¹⁾。

リカード『原理』の理論構造の問題については、スラッフアはやはり『リカード全集』「編者序文」で、『原理』前半部の理論的諸章の構造を「価値と分配の理論」として把握する解釈を提示した。この問題についても、羽鳥はスラッフアの解釈を批判し、独自の解釈を提示した。『原理』各章の配列が複雑であることは以前より知られており、多くのリカード研究者を悩ませてきた。その前半部の理論的諸章は以下のとおりである。

- 第1章 価値論
- 第2章 地代論
- 第3章 鉱山地代論
- 第4章 価格論
- 第5章 賃金論
- 第6章 利潤論
- 第7章 外国貿易論

これらのうち、第2章地代論及び第3章鉱山地代論(第3章は第2章の補論)が第1章価値論と第4章価格論に挟まれる位置に置かれており、いかにも不自然である。スラッフアは、リカードは賃金と利潤の分割の問題を単純化するために、第1章価値論の直後に第2章地代論を置いて地代の問題を先立って捨象しようとした、第4章価格論はもともと第5章賃金論の序章にすぎなかったと主張した(RW, I, p.xxiii)。このとき、第1章価値論から第3章鉱山地代論までを「価値の理論」、第4章価格から第6章利潤論までを「分配の理論」として把握することができる。しかし、羽鳥は、こうしたスラッフアの説明は不十分であるとして、リカードは労働価値理論の立場を正当化するた

めに、第1章価値論の前半で純粋な労働価値理論の論理を提示した上で、第1章価値論の後半で資本構成の相違に関わる問題を検討し、続いて第2章地代論で土地の肥沃度の相違に関わる問題を検討したと主張した。こうして羽鳥はリカード体系を「労働価値理論に基づく所得分配と資本蓄積の理論」として把握する彼自身の解釈を提示したのである（羽鳥 1972, pp.272-81）¹²⁾。中村の解釈はこうした羽鳥の解釈を継承し、発展させたものである。すなわち、中村はマルクスの二重構造の価値-価格論を意識しながら、リカードの価値論を「剰余価値論」、価格論を「自然価格論」として整理しようとした。そして、第1章価値論を「価値・剰余価値論」、第2章地代論を「特殊・具体的な形態における剰余価値論」と呼び、第4章価格論は「現実・具体の複雑な事情のうちに剰余価値論の原理が貫徹することを立証する」とした。このとき、第1章価値論を基本的ケースとして、第1章価値論と第2章地代論を「広義の価値論」として把握し、第4章価格論を「自然価格論」として把握した上で、これを方法的基礎として、第5章賃金論と第6章利潤論を「分配論」として把握する解釈が可能になる。こうして中村は羽鳥の解釈を徹底させ、「価値論」と「価格論」の二重構造の視角に基づいて、リカード体系を「自然価格論」と「分配論」として把握する彼自身の解釈を提示したのである（中村 1975, pp.191-201）¹³⁾。

3 リカード研究の新展開 —『リカードウ経済学研究』（1996）—

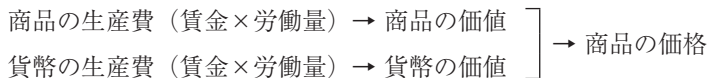
本章では、中村の『リカードウ経済学研究』の内容を検討する。その前編「リカードウ価値論の成立と展開」では、初期以降のリカードの労働価値理論の成立とその「修正」の問題が集中的に検討され、後編「リカードウ経済学の諸問題」では、リカードの貨幣数量説、賃金論、需要論、租税論といった価値論以外の論争的な諸問題が検討されている。これらのうち、以下では中村の最も独創的な解釈、すなわち、リカードの労働価値理論の成立の論理及びリカードの賃金論に関する中村の研究を概観する。

リカードの労働価値理論の成立の論理に関わる問題は、スラッファが十分に扱わなかった問題の一つである。スラッファは、リカードは『原理』では「穀物」に代わって、「労働」によって異質財の価値を集計するより一般的な労働価値理論を採用したと述べるに留まっていた（RW, I, xxxi-ii）。羽鳥はこの問題を探求していたが、中村は羽鳥の研究から多くの知見を獲得しながらも、羽鳥の研究に満足していなかった¹⁴⁾。中村はリカードがいかにしてスミスの「連動論」（賃金の変化が諸商品の価格の比例的变化をもたらすという原理）を克服し、「賃金-利潤相反論」を確立したのかという問題を探求していた。そこで、中村は1815年3月27日付のリカードのマルサス宛書簡（87）に見られる次の叙述に注目した。

「地金に関するパンフレットでも述べたように、多くの人は貨幣はただ一個の商品にすぎないもので、他の諸商品と同じく需要供給による価値変動の法則に従うものだと考えると言いながら、貨幣について推理をあまり進めないうちに、実際には貨幣を何か特殊な——他の商品に

影響する原因とはまったく違った諸原因から変動するものと考えていることを暴露しないことは減多にありません。あなたも『第一にすべては穀物と他の諸商品との関係に依存するが、労働と穀物はすべての商品に入るのであるから、穀物と他の諸商品との間の差額は穀物の貨幣価格に比例して増大するというはできない』とおっしゃるときに右の誤りに陥っておられるのではないのでしょうか？ もし貨幣が商品であるとすれば、その価格または価値の中に、穀物と労働が入っていくのではないのでしょうか？ もし入っていくとすれば、貨幣が穀物や労働のように他のすべての商品と同じ法則に従って変動しないというのはなぜでしょう？」(RW, VI, p.203)

ここでリカードはマルサスの見解を批判しながら、貨幣が労働生産物であることを前提として、貨幣は他の諸商品と本質的に同じ商品であるから、他の諸商品と同じ原因に依存して変化するに違いないと主張している。すなわち、賃金が増加したとき、他の諸商品の生産費が増加し、それらの価値は増加するが、同時に貨幣の生産費も増加し、その価値も増加するという。このとき、諸商品の価格が諸商品の価値と貨幣の価値の比率であることを前提として、両者が比例的に変化する限り、結果的に諸商品の価格は変化しない。中村はこうした論理がリカードの労働価値理論の成立のための決定的な基礎となったと考えた。これらの関係を図示するならば、以下のとおりである。



ここで賃金の変化が諸商品の価値の変化をもたらすという「連動論」は価値レベルで保持されているが、まさにその結果として、価格レベルでは消去されている。中村はこれを「連動論に基づく連動論顕化否定の論理」と呼んだ。そしてこのとき、賃金の変化は利潤率の逆方向の変化をもたらすという「賃金-利潤相反論」が成立し、同時に、投下労働量の変化は価格の変化をもたらすという労働価値理論の基本的命題が成立するのである(中村 1996, pp.20-27)¹⁵⁾。こうした中村の解釈は、生産費が価値を規定することを承認するものであり、リカードの労働価値理論を本質的に生産費説であると主張する極めて独創的な解釈だった。そして、こうした解釈を前提として、中村はリカードの労働価値理論の「修正」の問題の解明に取り組み、卓越した研究成果を生み出していった¹⁶⁾。ところで、こうした労働価値理論の解釈は、中村の立場が当初のマルクスの価値論の立場から大きく離れていったことを意味している。ここに至って、羽鳥は自分の立場と中村の立場が大きく異なるという事実を認めざるをえなくなったようである。なお、冒頭でも述べたように、筆者はこうした中村の労働価値理論の解釈を徹底させることによって、筆者自身のリカード解釈を生み出すことができた(福田 2006, pp.106-14)。

リカードの賃金論に関わる問題は、その決定の原理が難解であることや、リカードが当初、『原理』の第4章賃金論として執筆していた文章を刊行直前になって第4章価格論と第5章賃金論に分

割したという事情からも、リカード解釈の難点の一つであったといえるが、スラッフアも羽鳥もこれを十分に検討していなかった¹⁷⁾。そこで、中村はリカードの労働商品とは何か、労働の自然価格とは何かという点から探求を進めていった。そして、中村は労働商品の「価格調整機構」の問題に辿り着いた。中村は『原理』第9章原生産物租税論に見られる次の叙述に注目した。

「もしも市場にある帽子がその需要に対してあまりにも少なければ、価格は騰貴するであろうが、しかしそれはほんの短期間のことにすぎない。なぜなら、1年も経つうちに、その事業により多くの資本を使用することによって、帽子の分量にいくらかでも適当な追加を行うことができ、それゆえにその市場価格は長らくその自然価格を大幅に超過することはあり得ないからである。しかし、人間についてはそうはいかない。資本が増加する場合に、人間の数を1年や2年で増加することはできないし、また資本が減退の状態にある場合に、その数をすみやかに減少させることもできない。それゆえに、労働維持のための基金は急速に増減するのにも、働き手は緩慢に増減するから、労働の価格が穀物及び必需品の価格によって正確に左右されるまでには、かなりの時間的余裕がなければならない。」(RW, I, p.165)

ここでリカードは、一般の諸商品と労働商品では、価格変化(賃金変化)に基づく供給量の調整のために必要な時間が大きく異なると述べている。一般の諸商品はすみやかに調整されるが、労働商品は極めて緩慢にしか調整されないのである。しかし、両者は調整時間が異なるだけではない。中村はそれらの「価格調整機構」は「その作動の動因や仕方においても、その作動の場ないし次元においても、著しく異なっている」と指摘した。すなわち、一般商品の供給量は、総資本を一定と仮定して、需要の変化に対応して資本の部門間の配分が変化することによって調整されるが、労働商品の供給量は、社会全体の総資本=労働需要の変化に対応して、労働供給=人口が変化することによって調整されるという。これらを踏まえて、中村はリカードの労働商品の把握は「完全に転倒している」と述べた。リカードは労働供給を内生化した経済モデルを形成しようとして、労働力を自然価格の論理によって基礎づけようとしたが、そこには大きな困難があったのである(中村 1996, pp.249-53)。なお、中村は言及しなかったが、リカードが『原理』第4章価格論で一般の諸商品の調整の問題を扱い、第5章賃金論で労働商品の調整の問題を扱っていることを想起するなら、中村が指摘した問題は、リカードが第4章価格論と第5章賃金論を分割した理由を説明する材料になるかもしれない。また、『原理』第4章価格論と第5章賃金論に大きな断絶があるということ、あるいは第5章賃金論が、中村が指摘するような他の章に見られない特殊な性格をもつ議論であるということは、中村が以前の『リカードゥ体系』で提示した『原理』の理論構造に関する解釈を再検討する必要があることを示唆しているというべきかもしれない¹⁸⁾。

4 リカード研究の系譜—羽鳥卓也と中村廣治—

本章では、羽鳥と中村の関係について検討する。すでに述べたように、1970年代以降、羽鳥と中

村は互いに相手の研究から刺激を受け、互いに切磋琢磨しながら、日本のリカード研究を牽引していくようになった。以下ではそうした関係の内実を見た上で、羽鳥のリカード研究と中村のリカード研究を比較しながら、羽鳥から中村を経て今日の世代に繋がる日本のリカード研究の系譜について考えてみたい。

1965年、羽鳥は学会報告「初期リカードウの分配論」と論文「初期リカードウの価値と分配の理論」において、スラッフアの初期リカード解釈を批判した。当時、欧米のリカード研究者はもちろん、日本の研究者たちも、ほとんどがスラッフアの解釈に何ら疑問を抱いていなかった時代である。このことについて、1972年の学会シンポジウム「リカードウ研究における西欧と日本」¹⁹⁾において、羽鳥は述懐している。すなわち、羽鳥は、当初はスラッフアの解釈を歓迎していたが、内田義彦の下で支配労働価値説と投下労働価値説の関係を再検討していたこともあって、スラッフアのいう初期リカードの「穀物比率論」から労働価値理論への転換に違和感を感じるようになったという（入江 1973, pp.11-12）。こうしてスラッフアの解釈を批判するに至ったということであるが、その衝撃は大きかったであろう。中村は同じシンポジウムで次のように述べている。

「スラッフアから受けた衝撃と同様の衝撃を、私は小樽商大での羽鳥さんの報告から受けました。それまではスラッフアで良いんじゃないかと思っておりましてところ、それじゃいかんと言われるものですから、これは大変だと思って、もう一度検討してみますと、それまでも何となく居心地が悪い気持ちがあったんですけど、それを正面から出されまして、このままのリカードウ研究を続けても意味がないと思ひまして、それならば羽鳥さんの作業仮説が本当に生きるだろうかという問題で、始めたわけです。」（入江 1973, p.13）

こうして中村は羽鳥のスラッフア批判に衝撃を受けて、羽鳥のリカード研究を後追いするようになったという。やがて、羽鳥と中村に多くの日本のリカード研究者たちが続き、羽鳥と中村は互いに切磋琢磨しながら、彼らを牽引する役割を果たすようになった。羽鳥は1982年刊行の『リカードウ研究』「あとがき」において、次のように中村に対する謝辞を述べている。

「私は畏友中村廣治氏のお名前だけはここに記さずにはおられない。氏は多年にわたって、本書のテーマとほぼ重なり合うテーマを追求されておられるが、絶えず新鮮かつ意欲的な諸論著を發表されて、私に大きな刺激を与えて下さったばかりではなく、最近の十年あまりの間、私が発表した諸論著のほとんどすべてについて、その都度綿密に検討されて、あるいは直接の会話の中で、あるいは長文の私信によって、私見に対する忌憚のない批評を惜しみなく加える労をとって下さった。私は氏の御教示によって数えきれぬほど多くの論点について蒙を啓かれたのであった。」（羽鳥 1982, p.425）²⁰⁾

これに説明を加える必要はないだろう。羽鳥と中村がいかに互いに切磋琢磨していたかが非常によく分かる文章である。中村も『リカードウ経済学研究』「はじがき」において、次のように羽鳥に対する謝辞を述べている。

「とりわけ羽鳥教授には、本書のもととなった論考作成の段階から度々目を通していただき、

生来の軽忽ゆえの誤りをはじめ、さまざまの論点にいたるまで巨細にご指摘・ご教示、ご批判くださった。本書中にかりにも何ほどなりとも見るべき点があるとすれば、それはひとえに教授の学恩の賜物である。のみならず、ともすれば挫折を口実に怠慢に陥りがちな私を、あるいは叱咤、あるいは激励していただいた。」(中村 1996, p.ii)²¹⁾

こうして羽鳥と中村は互いに切磋琢磨しながら日本のリカード研究を牽引してきた。羽鳥がいなければ中村のリカード研究はなかったかもしれないし、中村がいなければ羽鳥のリカード研究もなかったかもしれない。上に述べたように、最初にスラッフアのリカード解釈の衝撃があった。その衝撃を受けながらも、羽鳥はスラッフアの批判を開始した。羽鳥のスラッフア批判の衝撃を受けた中村が羽鳥に続いた。そして、羽鳥と中村のリカード研究から衝撃を受けた今日の世代の研究者たちが羽鳥と中村の後を追っているのである。このようにして、スラッフアの衝撃は日本のリカード研究の中に吸収されていった。その流れの中核を担ったのが、羽鳥と中村の系譜的または相互的な関係であった。

日本のリカード研究におけるスラッフアのリカード解釈の吸収の形は、世界的に見ても異例であったと思われる²²⁾。それは羽鳥と中村の貢献であるというべきかもしれないが、それではどうして羽鳥と中村はスラッフアの解釈を全肯定も全否定もすることなく、その成果をバランス良く吸収することができたのだろうか。羽鳥は彼自身のリカード研究の方法についてまとまった叙述を残しているが、中村にはそれがほとんど見当たらない。羽鳥は1963年刊行の『古典派資本蓄積論の研究』「序説」他で、古典派の現代的意義を明らかにするためにこそ、歴史的事実に忠実でなければならないと述べていた(羽鳥 1963, pp.7-11)²³⁾。恐らくは、こうした羽鳥の方法を受け入れながら、中村は『リカードゥ体系』「はじめに」でわずかに次のように述べている。

「本書は、このような時代に生き、その時代の課題に敏感に反応しつつ、生成し、確立するリカードゥ体系を追跡するうちに、スミスからリカードゥにいたる古典派経済学展開の軌跡を、いわばこの個体発生の中にその系統発生を、およぶ限り綿密に、しかも展開の筋道に注目しつつ解明し、これに基づいて、リカードゥ体系の内的編成を照射することを目的とするものである。」

「本書のこのようなアプローチからして、叙述は、すぐれてリカードゥに内在し、ときどきの主要著作を環節とし、おりおりの書簡(とりわけマルサスとの往復書簡)がこれを連遷する役割を果たしつつ進められるだろう。リカードゥがそれぞれの時期=段階に到達しえた理論的な高み=深みを確定しつつ、しかもそのうちにはらまれる展開の内的動因の剔抉につとめながら。」(中村 1975, pp.1-2)

ここで中村は、古典派の理論史を解明するためには、リカードゥに内在しなければならないと述べている。そして、そのためにはリカードゥの主要著作だけでなく、それらを繋ぐものとして書簡についても検討し、リカードゥの各段階の理論的な到達点を明らかにしなければならないという。やはり中村も現代的(理論的)意義を明らかにするためにこそ、歴史的(文献的)事実にも忠実でなければなら

らないと述べているようである。羽鳥も中村も、このように現代的意義と歴史的事実のバランスを重視するという方法を自覚的に採用していたからこそ、スラッフアの貢献をバランス良く吸収することができたのではないかと思われる。そして、こうした羽鳥と中村の方法は、今日の日本のリカード研究にとって貴重な財産となっているに違いない。

おわりに

以上より、中村のリカード研究の特色が一定程度明らかになったものと思われる。中村は羽鳥のスラッフア批判から刺激を受けてリカード研究を開始し、その後も羽鳥の研究から刺激を受け、羽鳥と互いに切磋琢磨しながら、羽鳥とともに日本のリカード研究を牽引してきた。そして、羽鳥と中村は、リカードの労働価値理論の発展過程に関する研究を始めとする欧米には見られない独自のリカード研究の成果を生み出してきた。羽鳥と中村が今日の日本のリカード研究に及ぼした影響は大きい。

中村のリカード研究は、当初、羽鳥のリカード研究の後追いという形で始まり、また、マルクスの価値論を意識した解釈が目についたが、羽鳥の研究を吸収しながら、より綿密な検討を重ねていくにつれて、次第に中村独自のリカード解釈を打ち出すようになった。1960年代後半から1970年代にかけて発表された（『リカードゥ体系』に所収された）中村のリカード研究は、主として羽鳥のリカード研究の後追いとして着手されたものであり、綿密ではあるが、中村の独自性が十分に発揮された研究であるとはいえない。しかし、1980年代以降に発表された（『リカードゥ経済学研究』に所収された）中村のリカード研究は、十分に独創的であり、恐らくは、羽鳥の研究やマルクスの立場から距離を置くことを厭わず、中村なりにリカードに内在した結果に違いない。

中村のリカード研究の方法は、羽鳥の方法と同様、現代的意義を明らかにするためにこそ、歴史的事実の忠実であろうとする、現代的意義と歴史的事実のバランスを重視する方法だったといえるだろう。羽鳥も中村もリカード理論の現代的意義を明らかにすることを目指しながらも、綿密な文献的調査を行うことによってリカードに深く内在しながら、彼ら自身のリカード解釈を形成していった。ただし、中村の方が羽鳥よりも理論的志向が強いリカード研究を目指していたように思われる。徹底的に文献的調査を行いながらも、徹底的に理論的整合性を重視していたからこそ、中村は羽鳥の研究を乗り越え、マルクスの立場から距離を置くようになり、結果的に羽鳥よりも独創性の強いリカード解釈を生み出すことができたのではないだろうか。

日本のリカード研究にとって、羽鳥と中村の存在はかけがえのないものだった。スラッフアのリカード解釈の重要性については論を待たないが、日本のリカード研究がスラッフアの衝撃をバランス良く吸収することができたのは、羽鳥と中村の存在があったからこそである。スラッフアの衝撃は羽鳥と中村の研究によって十分に吟味され、千賀以降の日本のリカード研究者たちに受け継がれている。こうしたリカード研究の系譜は、『リカードゥ全集』刊行以来、今日に至る日本のリカー

ド研究史において重要な位置を占めている。

[謝辞] 筆者も大学院生だった頃から中村廣治教授から懇切丁寧なアドバイスやコメントを度々頂戴したばかりでなく、中村教授のリカード研究から大きな影響を受けた。中村教授のリカード研究がなかったなら、筆者のリカード解釈もあり得なかった。ご冥福をお祈りする。なお、本稿は、科学研究費補助金基盤研究(C)「日本のリカード研究の独自性と多様性に関する研究」(課題番号15K03376)の助成を受けた研究成果である。

注

- 1) 『リカード全集』刊行後の日本のリカード研究史については、真実 2000; 水田 1985; 中村 2007; 千賀 2006を参照。また、筆者の研究として、福田 2008; 福田 2014; 福田 2015を参照。
- 2) 千賀重義氏は『経済学史学会ニュース』第45号に追悼文を寄稿した(千賀 2015)。また、佐藤有史氏は『マルサス学会年報』第24号に追悼文を寄稿した(佐藤 2015)。この他、リカード研究会は2016年中に追悼シンポジウムを開催することを計画している。
- 3) 筆者は中村のリカード労働価値理論の成立の論理に関する解釈に基づいて、筆者自身の理論モデルを定式化し、これを基礎として、リカードの労働価値理論の修正の論理や『原理』の理論構造について検討した(福田2006, pp.106-14, 170-86)。
- 4) 羽鳥は1965年の第29回経済学史学会大会において、報告「初期リカードの分配論」を行い、スラッファの「穀物比率論」解釈を世界で最初に批判した(1965年9月25日、小樽商科大学)。
- 5) 『リカード経済学研究』については、深貝 1997; 佐藤 1997を参照。
- 6) 『リカード評伝』については、水田 2011; 千賀・佐藤 2010を参照。
- 7) 晩年の中村はマルサス研究の論文を多数発表した他に、2012年の第22回マルサス学会大会において、特別講演「マルサスとリカード、等しからざる関係」を行っている(2012年7月8日、佐賀大学)。
- 8) スラッファによると、初期リカードは「穀物比率論」を採用していたために、価値決定の問題に煩わされずに利潤率の決定の問題を扱うことができたという。そして、スラッファはこうした解釈を正当化するために、1814年6月26日付のリカードのマルサス宛書簡(50)(RW, VI, p.108)、1814年8月5日付のマルサスのリカード宛書簡(54)(RW, VI, p.117)、1815年2月刊行の『試論』の「地代と利潤の増進を示す表」(RW, IV, p.17)という3つの「間接的証拠」を挙げた(RW, I, pp.xxxi-ii)。
- 9) 羽鳥はスラッファが挙げた間接的証拠を検討し、リカードが「穀物比率論」を採用していたというスラッファの解釈に疑問を付した(羽鳥 1972, pp.196-213)。福田 2008, p.46; 福田 2015, p.168を参照。
- 10) 後年、羽鳥は書簡(50)の叙述について、農業部門の利潤率は「生産の比率」に依存し、製造業部門の利潤率は「食糧の安価さ」に依存するということを意味していると主張して、千賀重義の「部門別利潤率規定論」解釈を擁護した(羽鳥 1982, pp.23-25, 43-44n)。
- 11) 千賀は「初期リカードにおける価値と貨幣の理論」(千賀 1972)において、初期リカードは農業部門については実物ターム、製造業部門については価格タームで利潤率の決定について議論していたという「部門別利潤率規定論」解釈を提示した。当初、中村は千賀の解釈に反対していたが、羽鳥の主張を受け入れて、羽鳥とともに千賀の解釈を支持するようになった(中村 1972; 羽鳥 1982)。福田 2008, pp.47-50を参照。
- 12) 羽鳥の『原理』理論構造の解釈については、福田 2015, p.170を参照。
- 13) スラッファと中村の『原理』理論構造の解釈については、福田 2006, pp.166-69を参照。なお、中村は『原理』第7章外国貿易論は「利潤論」の一環をなし、リカードの経済学体系を完結させる位置にあると主張した(中村 1975, pp.197, 267-73)。
- 14) 羽鳥もリカードの労働価値理論の成立の論理について、スミスの支配労働=価値尺度論の克服という視点から検討を積み重ねている(羽鳥 1982, pp.108-52)。福田 2014, pp.9-11を参照。

- 15) 中村のリカードの労働価値理論の成立の論理に関する解釈については、福田 2014を参照。
- 16) 中村はこうした労働価値理論の解釈を基礎としながら、トレンズとリカードの論争やマルサスとリカードの論争を綿密に検討し、リカードが賃金の変化にともなう価格の変化の問題（中村は「修正Ⅰ」と呼ぶ）から、資本構成の相違による価格の相違の問題（同じく「修正Ⅱ」）に議論の重点を移していく過程の詳細を明らかにした（中村 1996, ch.2-5）。
- 17) リカードの賃金論をめぐる問題については、福田 2006, pp.132-42を参照。
- 18) リカード『原理』第4章価格論と第5章賃金論の相違について、筆者は第4章価格論は部門間調整による均等利潤率の成立の論理を説明するものであるから、第1章価値論の前提であり、第5章賃金論は他の諸章に見られない動学分析の原理を扱うものであるから、リカードの分析を動学分析に拡張する要素として位置づけられると考えている。福田 2006, pp.187-94を参照。
- 19) このシンポジウムは、1973年の第36回経済学史学会大会において開催された（1972年11月12日、松山商科大学）。このときの報告者は、羽鳥卓也、中村廣治、千賀重義、討論者は、真実一男、時永淑、森茂也、坂本弥三郎、溝川喜一、豊倉三子雄、司会者は玉野井芳郎という錚々たる面々で、後日、入江奨がシンポジウムの記録として「学界展望」（入江 1973）を作成した。
- 20) 羽鳥は1995年刊行の『リカードの理論圏』「あとがき」でも、中村に対する謝辞を述べている（羽鳥 1995, p.196）。
- 21) 中村は同じ『リカードウ経済学研究』「あとがき」でも、論文執筆の経緯を説明する中で、羽鳥に対する謝辞を述べている（中村 1996, pp.349-50）。
- 22) 『リカードウ全集』刊行後、欧米ではスラッファのリカード解釈が支配的見解となり、やがてスラッファの解釈をめぐる激しい論争がリカード研究史を特徴づけるようになったが、日本では、羽鳥と中村を始め、多くのリカード研究者たちはスラッファの解釈を冷静に受けとめ、批判的に吸収していった。福田 2006, pp.1-5; 福田 2008; 福田 2014を参照。
- 23) 羽鳥は1963年刊行の『古典派資本蓄積論の研究』「序説」において、「およそ経済学史研究の目的は……究極的には資本主義経済社会のメカニズムの解明そのものにとって有効な迂回手段を提供することにある」、「批判的研究は、それが行われる前に、あらかじめ批判すべき対象そのものの忠実な理解に達していなければならない」等々と述べた（羽鳥 1963, pp.7-14）。また、羽鳥は1972年刊行の『古典派経済学の基本問題』「あとがき」においても、同様の研究方法について論じた（羽鳥 1972, pp.411-19）。福田 2015, pp.173-75を参照。

参考文献

- Ricardo, D., Sraffa, P. (ed.) 1951-73, *The Works and Correspondence of David Ricardo*, 11 vols, Cambridge: Cambridge University Press. 堀 経夫他（訳）1969-99 『デイヴィッド・リカードウ全集』全11巻, 雄松堂書店
- Sraffa, P. 1951, Introduction, in Ricardo, D., Sraffa, P. (ed.) 1951-73, vol 1, pp.xiii-lxii. 堀 経夫他（訳）1969-99, 第1巻, pp.xxiii-lxxxiii.
- 深貝保則 1997 「〈書評〉中村廣治『リカードウ経済学研究』」『熊本学園大学経済論集』3 (3/4), pp.81-90.
- 福田進治 2006 『リカードの経済理論』日本経済評論社
- 福田進治 2008 「日本の初期リカード研究」『人文社会論叢 社会科学篇』20, pp.41-62.
- 福田進治 2014 「日本のリカード研究—労働価値理論を中心に—」『マルサス学会年報』23, pp.1-33.
- 福田進治 2015 「羽鳥卓也のリカード研究」『人文社会論叢 社会科学篇』33, pp.167-78.
- 羽鳥卓也 1963 『古典派資本蓄積論の研究』未来社
- 羽鳥卓也 1965 「初期リカードウの価値と分配の理論」『商学論集』34 (3), pp.91-151.

- 羽鳥卓也 1972 『古典派経済学の基本問題』 未来社
- 羽鳥卓也 1982 『リカードウ研究』 未来社
- 羽鳥卓也 1995 『リカードウの理論圏』 世界書院
- 入江 奨 1973 「[学界展望] リカードウ研究における西欧と日本」『経済学史学会年報』 11, pp.11-20.
- 真実一男 2000 「我国の戦後リカードウ研究の回顧」『経済学史学会年報』 38, pp.76-82.
- 水田 健 1985 「リカードウ研究」『経済学史学会年報』 23, pp.13-22.
- 水田 健 2011 「[書評] 中村廣治『リカードウ評伝：生涯・学説・活動』」『マルサス学会年報』 20, pp.119-24.
- 中村廣治 1972 「Intermezzo—初期リカードウ利潤理論にかんする千賀説の吟味—」『経済論集』 24(1), pp.1-12.
- 中村廣治 1975 『リカードウ体系』 ミネルヴァ書房
- 中村廣治 1996 『リカードウ経済学研究』 九州大学出版会
- 中村廣治 2007 「わが国におけるリカードウ研究」『商経論叢』 43(1), pp.67-77.
- 中村廣治 2009 『リカードウ評伝—生涯・学説・活動—』 昭和堂
- 佐藤有史 1997 「[書評] 中村廣治『リカードウ経済学研究』」『経済学史学会年報』 35, pp.159-61.
- 佐藤有史 2015 「[追悼文] 中村廣治先生の思い出」『マルサス学会年報』 24, pp.209-13.
- 千賀重義 1972 「初期リカードウにおける価値と貨幣の理論」『経済科学』 19(3), pp.91-114.
- 千賀重義 2006 「デイヴィッド・リカードウ」, 鈴木信雄(編)『経済学の古典的世界 1』 日本経済評論社, pp.175-222.
- 千賀重義 2015 「[追悼] 中村廣治会員」『経済学史学会ニュース』 45, p.19.
- 千賀重義・佐藤有史 2010 「中村廣治『リカードウ評伝—生涯・学説・活動—』」『経済学史研究』 52(1), pp.88-94.